

# 私立大学研究ブランディング事業

## 2018年度の進捗状況

学校法人番号	401008	学校法人名	福岡大学		
大学名	福岡大学				
事業名	ライフタイムにおける活力形成による健康な時間の創造～福奏プロジェクト～				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	17120人
参画組織	基盤研究機関研究所、産学官連携研究機関研究所、医学部、薬学部、スポーツ科学部、人文学部				
事業概要	現代社会において、子育て力の低下、学校不適應の子供の増加、生活習慣病の蔓延、高齢者の認知症や閉じこもりなど、健康な時間を過ごせない問題が生じている。本福奏プロジェクトは、家族支援、学校教育支援や中・高齢者活動を通じて、身体的・心理的・社会的介入を実施し、活力ある人間をつくる健康先進プログラムを開発することにより、大学の「知」を社会の「価値」に転換し、健康持続社会の実現につなげる。				
①事業目的	<p>本学のスローガンである「人をつくり、時代を拓く。」は、教育方針として掲げる全人教育を「人をつくり」に託し、教育・研究・医療を通じて、社会の発展に積極的に貢献している姿を「時代を拓く」に託している。創立100周年に向け、「建学の精神」に立ち返り、「積極進取」の気概を持って「エネルギーで行動的な大学」の実現に向け「アクティブ福岡大学」を掲げ活動している。本事業の目的は、「社会に活力を生み出すアクティブ福岡大学」として、ライフタイムにおける活力を形成し、健康な時間を創造することである。そのため、福岡大学における医学、薬学、スポーツ科学さらには教育・臨床心理学の成果をもとに、自治体及び企業と連携して「福奏(フクソウ)」プロジェクトを展開する。福奏とは、地域の助け合いを基盤に、人々の福(ハッピー)を奏でることにより、健康持続社会の実現を目指すことである。</p>				
②2018年度の実施目標及び実施計画	<p>2018年度の目標</p> <p>チームⅠ【中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究】 健康づくり:連携企業の従業員を対象にHTを展開すると共に、プログラムの効果を身体機能全般より評価する。 サイバニクス:神経難病、四肢病態、健常者を対象にHAL<sup>®</sup>を用いた機能回復の至適運動処方を開発する。 社会活動支援:研修プログラムの充実と評価、その後の実践活動への展開を促進する。</p> <p>チームⅡ【学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究】 学校適応:2年目介入(小学5年-主張スキル、中学2年-ストレスへの対処)。 体育支援:体力等に係る経年推移の分析とCTのDVD完成・配布。</p> <p>チームⅢ【妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究】 子育て期における子育て支援活動を展開していくため、子育てサークルなどの指導者を対象に健康支援対応力の向上を図る。 【ブランディング】中長期計画を実施するとともに、ブランディングの必要性やねらいを学内関係者に浸透させる。</p> <p>2018年度の実施計画</p> <p>Ⅰ 健康づくり:企業の健康保険組合向けに導入し対象者を拡大し、運動が身体に及ぼす適応メカニズムに迫る。⇒対象者が増大したか(目標50名)、微量生体試料・血管のスティッフネス・筋量及び脂肪量による分析が進められ、成果を国内外に発信できたかで評価する。 サイバニクス:運動強度と活動様式を組み合わせ多角的に検証を行い、機能回復のカギとなる分子メカニズムを筋生検により探る⇒分子メカニズムのキーファクターとしてPGC1<math>\alpha</math>分子の遺伝子発現を定量化する。 社会活動支援:西部ガスCS全社展開の評価を経て、自治体での研修スキルのシステムを整える。⇒西部ガスの検証で、コミュニケーション能力の高い人材育成に寄与したか、その結果を踏まえて自治体での研修に繋がっているかで評価する。</p> <p>Ⅱ 学校適応:第2期(小5・中2)を対象に初年度と同様の介入、並びに評価を行う。 体育支援:体力・運動能力・生活習慣調査の経年推移を分析する。CTのDVDを福岡市の全小中学校へ配布する。⇒体力等に係る分析結果が出揃い、体育支援への活用法が提示されていること。DVDの配布が完了していることで評価する。</p> <p>Ⅲ 子育て期の家族、保育士・幼稚園/養護教諭等の指導者に対して、健康支援対応力の向上を図るため子どもにみられる病気やけがの対応について、乳児モデルやSIMジュニアを用いて模擬研修や公開講座を開催する。⇒研修や講座の開催回数(目標5回)で評価する。 【ブランディング】ブランディング効果を数値化するため、モニター制度の創設、関係者へのヒアリング・アンケート調査、外部機関を利用して情報収集を行う制度を確立する。</p>				

<p>③2018年度の事業成果</p>	<p><b>チームⅠ【中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究】</b>  <b>健康づくり:</b>健康づくりを目的とした一般市民6名と、減量と記録向上を目的としたランナー4名を対象に、ヘルスツーリズムを実施した。プログラムは、2泊3日または6泊7日の短期合宿にて、身体活動量の確保及び食事管理による減量方法を習得した。その後約1ヶ月間の自己管理による減量を継続した。一般市民においては、2泊3日の短期合宿中の1日あたりの平均歩数は、37,433歩であった。スタミナは約5%の向上がみられた。体組成においては、体重が3kg減少し、その内訳として体幹部脂肪率が10%の減少が認められた。除脂肪体重においては、1%の減少であった。血液生化学検査は、LDLコレステロールが6%減少し、中性脂肪(トリグリセリド: TG)の値が12%減少した。ランナーにおいては、スタミナは平均で6%の向上が認められた。また、漢方薬や健康食品の認知機能に対する効果検証を見据え取り組んでいるマウスを用いた動物実験において、八味地黄丸摂取と運動の組み合わせは社会的認知機能を向上しなかった。今後は使用するマウスを高齢もしくは老化促進マウスに変更し実験を重ねる計画である。今回の実験では、八味地黄丸は脳由来神経栄養因子(BDNF)発現カスケードにおけるPGC1<math>\alpha</math>以降の分子に作用していることが示唆された。</p> <p><b>社会活動支援:</b>2017年から引き続き2018年度も全社展開として高齢者サポートに向けたコミュニケーションスキル研修を実施した。コミュニケーション自己評価は最初3.48点であったが、最後には3.99点と有意な差を持って高くなっていた(P&lt;0.05)。2年間を通して「コミュニケーションスキル向上をめざした教育プログラム」の有効性が示唆された。検針員が得たスキルを継続できるか、高齢者との場面で活用できるかどうか、今後の課題である。</p> <p><b>チームⅡ【学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究】</b>  <b>学校適応:</b>SST(Social skills training)を活用した介入を開始し2年が終了した。この2年を振り返ると小学生はSSTの目的の理解が深まり、学級や家庭で様々な変化が見られ社会的スキル尺度、自尊感情尺度にもあらわれていた。担任にもSST授業の観察を通して“しっかりよいところをほめる”ことの大事さへの気づきがあった。SSTでは日常の学校生活でみられる具体的な対人場面を、すべての子どもが練習する。この方法がスキルの獲得を促し、それによって自信、自尊感情の向上をもたらし得るといえる。</p> <p><b>体育支援:</b>小学校の体育授業におけるサッカーやコーディネーショントレーニング(CT)の実技指導や講習会を実施した。CTの書籍やDVDを作成し、福岡市内の全小中学校に配布した。水泳やスノーケリング教室では水に対する抵抗感や不快感が緩和されて、自発的に25m以上を泳げるようになるなど成果が見られた。体力測定サポートでは、生まれ月と体力について検討し、児童期においては1~3月生まれ(早生まれ)が4~6月生まれに比べ体力レベルが低いことを示した。早生まれの児童において運動部・クラブに所属することで体力テストの結果が4~6月生まれと同等レベルにできることが確認できた。</p> <p><b>チームⅢ【妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究】</b>  <b>孫育て・子育て講座</b>を12回開催し、計160人が参加した。プレママパパ・ワークショップは2回開催し、計25組48人が参加した。さらに、福岡市子育て支援部の「健康安全研修会」を共同開催した。研修会は、基礎編(299人参加)と実践編(2回開催し計75人参加)、振り返り編(30人参加)を行い参加者の支援技術の効果評価を行い、以下の結論を得た。1)保育士の保育中にヒヤリハットした経験75.3%、子どもの急変によって救急対応の経験22.1%であった。2)シミュレーション研修は、経験が少ない救急場面をイメージしやすく、具体的な対策を考えることができていた。3)保育と医療職が連携して研修の機会を持つことによって、保育士は医療的な知識・技術の向上を図るとともに、医療職は保育の現場での問題点や保育ならではの工夫点を知り、相互作用によって子どもたちの養育環境を整えていくことにつながる。</p> <p><b>【ブランディング】</b>広報委員会にて外部機関の大学ブランド・イメージ調査の経年的な結果を報告することで、学内関係者へ、現状の理解促進を図った。また、ブランディングの状況把握のために、本学刊行物の読者アンケート等において、本学へのイメージ調査を行うと共に、新聞への大学活動紹介広告掲出時に実施された高校教員、高校生向けのアンケート結果等から、本学のブランドの浸透状況についての把握に努めた。</p>
<p>④2018年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)事業全体として、「イノベーション・ジャパン2018-大学見本市」の「大学組織展示」への出展、国際シンポジウムの開催、HPの更新(計60回)、報告書の取りまとめと外部評価の実施、研究ブランディング推進会議の開催等に取り組んだ。各研究チームの進捗状況と合わせ、概ね実施計画に従い進行しているが、研究チーム間により進捗に差が生じている状況である。研究遂行と社会実装のバランスを勘案しながらプロジェクトを進めていく事が課題である。</p> <p>(外部評価)外部評価委員10名(有識者・企業・自治体)に、平成30年度報告書一式を送付し、書面による外部評価を行った。各チームの活動において、一般的な講演形式や運動指導の枠を超え、器具の使用や創意工夫を凝らしたプログラム内容を考案しターゲットとなる世代へアプローチしている手法に対して高い評価を得た。いずれのテーマも社会的に重要課題であることから、自治体への波及や国や県のモデルケースへと発展させる事、持続へ向けた民間への移行・健康経営としての普及など社会実装への期待・要望が多く寄せられた。また、実施に係る現場負担の軽減の為に、IoT機器の活用についてもアドバイスを頂戴した。</p>
<p>⑤2018年度の補助金の使用状況</p>	<p>大学負担 19,936,634円</p>